

もうひとつの“親族” ——チワン族の「ラオトン」

塚田 誠之 つかだ せいし 民博 民族文化研究部

ラオトンとはなにか

この数年、わたしは中国南部、広西壮（チワン）族自治
区のベトナムとの国境地域で、国境のチワン族が構築する
ネットワークについて調査をおこなっている。わたしが注目
したのが「ラオトン」という存在である。そ

れは、血縁関係にはないが、一般的な友人
よりも親しく、家族の一員に近いもので、い
わば義兄弟、擬制的な親族といつてよい。
年齢はほぼ同じくらいである。若いときに
知り合って、一生つきあいが続く。たがいの
家の祝い事や葬式に出席する。平常時にも
訪問しあう。国境を越えてベトナム人とラ
オトンになることも少なくない。距離の離
れた異なる村であることが多い。現在、ラ
オトン関係にある人びとはほぼ六〇歳以上
である。中国では若者の多くは、沿海部に
出稼ぎへ行って、現地にはほとんどいない。
そのこともあって調査は難航したが、粘り
強く調査を続けるうちに、予想以上の良質
のデータがえられた。

じつの家族同様の待遇

祝い事に参列する場合、相応の礼物を持
参する。ある人がラオトンの父の長寿祝いに参加したとき、
子豚の丸焼き一頭を贈った。これはじつの息子が贈るものと
同じものである。祝いの儀礼のとき座る位置は一列目のラオ
トンの隣に設けられた。また、ある人はラオトンの父の葬



中越国境の村。国境地域に暮らす人びと

式の際に、ラオトンと一緒に喪装（白布を頭に巻く）をして、
棺の前方に立って埋葬地まで歩いた。このようにラオトンは
実子同様の待遇を受ける。このことは呼称にもあらわれて
おり、ラオトンの父母を相手側は「父母」とよぶ。ラオトン
の子ども同士は「兄弟姉妹」とよぶあう。

国境をも越えるもうひとつの「親族」

ラオトン関係を結ぶには、相手と意
気が投合することが必須である。ただ
し、たがいに助け合うことなど一種の
見返りを求める人も少なくない。国境
地域は人びとの流動が激しく、政治的
にも不安定な状況にあった。そうした
なかでチワン族の人びとは生活の安定
を求めて、地縁・血縁の関係を強める
とともに横のつながりをも求めてきた。
ラオトンは人びとの生存戦略の一環とし
て生まれ継承されてきたのである。中
国人が日本人よりも多方面に人間関係
のネットワークを結ぶことはよく知ら
れている。しかしラオトンのように国
境を越えて結ばれる関係についてはほ
とんど知られていない。隣国の人びと
の文化的特質について理解を深めることは意味のあることだ
ある。とともに、中国人とは環境や考え方が異なるものの、
日本でも社会において横のつながりを生かすことは人生をよ
り充実させるよう思われる。